田口卯吉著

日本開化小史

巻之六

五

柳田文庫
文庫11
A1627
6

文庫11
A1627
5

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版

日本開化小史巻の六目録

第十二章　文學進歩の景況
文學貨財の進歩常に小遲速あるとは雖も大体に於ては併行せ
二千四百年代の文運と撥乱反正二千五百年代の
文運に守成修補
封建開化の性質（上下懸隔重族）
社會と自ら救治を為す
社會の發達は草木の發達の如くこれを發達せしむ
るの方法覩やすし

第十三章

徳川政府ハ不利なる勤王心の發達

謀反の口實

忠義心ハ封建制度ニ利ふるう為めハ發達セ

忠義心大ハ發達して徳川政府ニ不利となる

歴史、和學、儒者、勤王心ヲ鼓舞す

勤王心ヲ徳川氏を倒そふ足らぞ之を倒を外寇ニ

あり

愛國心の勃興

徳川政府、天子の詔を以て開港せんと欲セ

此策成らぞして徳川政府之を専決セ

諸侯の志士天子を奉して攘夷を行ハんとセ

御上洛の失敗

各地騒擾

長藩を討して勝たず

将軍政權を奉還セ

将軍恭順謹慎

輿論抗セべからぞ

外交一ゝび開くゝとなる徳川氏の制度復た維持

すべからず

早稲田大学図書

戰國

日本開化小史卷之六

第十二章

田口卯吉著

德川氏治世の間ふ世ゝ顯はきたる開化の現像

右の如く外物の有様進歩せしうゝ心裡の有様亦發達せさるを得ゝ其景況左の如し

文學の概況

戰國の時ふ當りて下野足利學校あゝ相模ゝ金澤ふ文庫ゝり京都ふ五山（南禪寺東福寺天龍寺相國寺滿壽寺）あゝて文學を保護せり足利氏若くハ管領家の補助ゝよゝ若くゝ自家の所領ありて維持せしもゝ戰爭ゝ暇なゝり固よゝ武人ゝそれゝ文章の事ハ久しく僧侶の司ゝ所となりて宣戰講和の文よりて平時皆ゝ圓顱のの交際ふ至ゝて顱の人ゝ就ゝて中ふ社會ふめたり行ハれ孔禪理之ふ社會知んと行跡を孟の尤ふ武人無識者識あ跡をも絶て道も當ハ多く僧の學ふ所ひなきを行凡ゝ為ゝ程ゝり侶學ふ雄豪傑て圓ハ人英ふ學ふ人ゝと云ハ細衣念

早稲田大学図書

佛の人多し社會の文運地に落ちし時なれど名僧知識と称せらるゝものと雖も多く書籍に渉りし人なし當時の事を記したる書物はに出てそ況して古代の事學術の事なとと記そこもれにし唯行ハ社子つるなそ詩歌連俳の類のみなりき頓阿の井蛙抄宗祇の新撰莵久波宗碩の藻塩草の類戰國の時に輩出したるし英雄豪傑の士も亦たり見つも此聞くるのに就さて感慨と催し詩歌連俳にとるて其想像と述にるものある能き能くし自らに舞ひ且つ謠ひて樂しミとせり其知識之よ止まるう故に文章の見るへきものなし織田豐臣二氏出でし前後より文學少しく進

歩せしものと見えたり彼の淨瑠璃の文章も此時代よる漸こに多く世に出く而して木下長嘯細川幽齋松永貞徳の輩皆歌學と講究し後人を益するもの著書あり然れとも未た孔孟の學世に行ハれざるさ此時藤原惺窩先生天性明敏にして紛乱闘争の開な讀書し初めて程朱窮理の學と我國に唱へり蓋し支那國宋の時に當りて文學大に開け心性理學に注くこと愈よ密なり是に於て周敦頤程顥程頤朱熹の諸學士出ていて格物致知の理に因りて孔子の道と會釋し性理の點に於て大に研究する所あるき是まり以後此學盛に行ハル終に我國に傳へそ惺窩氏そし

て之と奉せしむるに至き盖し此時乱漸く定り我國の氣運亦之を容るゝに至るしと見えたり之ちら先二千年代の末玄恵法印始めて朱註を説けりと云へり然せとも當時氣運の未た至らさなる為めるや一たひ其種子れ發すはあるも終に成長そる能そさるき玄恵死せし後二百餘年にして始めて惺窩氏出て、大に其學と鼓舞そ盖し禍乱鎮定の時機に際せチ於そ惺窩氏も亦一玄恵たらんのに其乱古にあるて依然として朱學と奉し當時に盛なりし佛學き排斥して儒學於弘めんと欲しそそ其志驚くへしと雖も盖し亦幸運の人と云ふべし然るに雖も氏の出

るにあらされは德川氏の文運未た此の如く速に發達せさるべし

醫學

足利氏の馭を失せしより海内鼎沸人に心伐道藝に用ふるなし醫家亦僅に宗の司方等を奉して固陋自ら安したるしう元亀天正の頃(三千二百三十年の頃)曲直瀬正慶なるもとある専ら李朱の法伐宗のし参るに恒德雲林諸家を以てし造詣極めて深く治效亦彩し(皇國名醫傳)

二千　二百　六十　三年　ヨリ　二千　三百　年ヲ　（将軍）　家康　秀忠　家光　（年號）　慶長　元和　寛政

朱子學

惺窩の弟子林羅山は大学の程朱の学を弘むるを著書数百部あり石川丈山は詩宗と能くす我国興破活殺の所称なり林羅山は天王と称す意林庵と号ふ皆儒学の説を奉ず

王陽明學

近江の人中江藤樹は陽明の学を得て大いに喜び始めて全書を唱ふ王氏の学是なり其説を起す藤樹篤学にして品行方正聖人と云ふ世人称して近江聖人と云ふ

朱子學

林羅山は朱子の子孫なり酒井忠世の祭酒の説を奉ず春齋は其子鳳岡の子なり徳川家光の時に当り其学愈々盛なり土佐の熊澤蕃山は中江藤樹の門人なり兼ねて陽明の学を兼ね前に以て正学を雪山と号す鹿素行は山鹿素行の名あり皆経済の学を以て世を治めんとす千代田城の大学頭たり江戸城の大学頭たり其著書千百年に尋ぐ四方に振ひ常に傑出せり其盖し一代の初に当り人心の定まる所なり

醫學

曲直瀬道三は正親町帝の侍医なり子孫相続て正慶に至る其門人に撰者あり著書多く世に伝ふ正紹は文禄の時に出で紹鷗と号す百年の後日本の医学を一変す其人名を明代に伝ふ法眼に叙せらる功能偉なり詳密なり其説を加へ元和の時に一変す医籍を編纂す世に生ず

四百　年代　（将軍）　家光　家綱　綱吉　家宣　家継　（年號）　吉宗　寛永　正保　慶安　承應　明暦

朱子學

澤野中兼山は皆経済の学を以て世を治めんとす千代田城の大学頭たり江戸城の大学頭たり其著書千百年に尋ぐ四方に振ひ常に傑出せり其盖し一代の初に当り人心の定まる所なり

鹿素行は聖経を宋儒の説に深く録せり其説活潑なり儒者の謂ふ所なり人心の俊ふ

朱子學

朱子の説を奉ず其学徳川政に佐て熊澤蕃山の前に以て正学を雪山と号す鹿素行は山鹿素行の名あり皆経済の学を以て世を治めんとす千代田城の大学頭たり江戸城の大学頭たり其著書千百年に尋ぐ四方に振ひ常に傑出せり其盖し一代の初に当り人心の定まる所なり

乱の為め小瓶塞せられ戰ふに久しく戰ふ

卓見多思に外書を非とし大学或問等の頗る義和程山崎の説を奉ず朱子の書を

醫學

始め日本の医学を一変す其人名を明代に伝ふ法眼に叙せらる功能偉なり詳密なり其説を加へ元和の時に一変す医籍を編纂す世に生ず

直瀬道三は正親町帝の侍医なり子孫相続て正慶に至る其門人に撰者あり著書多く世に伝ふ正紹は文禄の時に出で紹鷗と号す百年の後日本の医学を一変す其人名を明代に伝ふ法眼に叙せらる功能偉なり詳密なり其説を加へ元和の時に一変す医籍を編纂す世に生ず

記入すべき人物の年代を明らかにす

新井白石は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

直方は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

闇斎は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

弟子は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

代々は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

なる者は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

其始は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

日本の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

本邦の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

南海の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

白石の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

浅見の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

安積の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

海原の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

石井の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

室鳩の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

絅斎の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

益軒の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

今井の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

儒者の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

勃興の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

智力の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

滋泊の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

篁洲の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

巣南の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

木下の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

宅重の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

三宅の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

水是の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

森千の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

門人の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

固和の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

甚ら水の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

等述の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

四以の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

子井の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

ハ懶の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

当斎の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

ら江の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

戸皆の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

共経の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

由ふの医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

井儒の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

軍者の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

学の医学は朱子の学を好む聘せられて侯門に出入す

萬治 寛文 延寳 天和 貞享 元禄 寳永 正徳 享保 元文

瀾皆朱學を奉す

復古學

斯く漢學旺盛になりて心を朱註に注ぐもの多きときは其間又異論の發するは勢の然らしむる所なり此時に至りて伊藤仁齋始めて復古學を京師に唱ふ其言に曰く性理の學は孔子の主意にあらず程朱等佛説を容れて孔子の説と補ふ是れ大に誤まれり抑も孔子の言ふ所は性と教とを兼ぬるものあり宋儒の學性を以て學問の全體となせり大學は孔子の遺書にあらず明鏡止水沖漠無朕體用一源等の説皆佛老の淫辞にして聖人の意にあらずと其子東涯蘭嵎

其弟子並河天民等大に其説を鼓舞す此時物徂徠出て始め宋儒の説を奉して蘐園隨筆を著し仁齋の復古學を駁したりしが其後李王明の人王世貞李攀龍の書を讀み大に感し盡く舊學を廢て古代の文辞を治め益〻宋儒の非を知れり因て歎して曰く豈唯我のみならんや滔々たるもの天下皆是なり豈唯今日のみならんや千古以來皆是なり乃ち論語徵辨道辨名學則等の書を著し宋儒を痛擊し思孟を誹議し務めて門戸を立てり其弟子太宰春臺安藤東野山縣周南服部南郭平野金華鳴島錦江の徒從いて之を鼓舞し海内一時之が為に風靡す平安の宇士新同士朗

又一家言を立つ宋儒の學之より衰ふ

經濟學

熊澤蕃山の大學或問物徂徠の政談太宰春臺の經濟錄等皆後世經濟學と称するものは一種に注目すべきものあり新井白石の折焼柴の記れ貨幣論中最も感服すべきものあり

開化史

白石の卓見なるに深く社會の理に注目する所あり讀史餘論を著し日本古来政府興廢の理を述ぶ後世史家其餘澤を蒙る少からず盖し當時の文運を飾るに足るの一書なり

和學

此時に至りて和學亦進めり下河部長流大阪にありて二千四百年代の始め早く既に萬葉集源氏物語等を註釋し古代の言語文章を研究せり之に次こ僧契冲長流の親友なりとぞ大に此學を興せり伴蒿蹊曰く此師の歌學顯昭法橋の説を梯として古書を見明らめしものと覺ぼし凡そ近世の人唯く中川れ流の説にあらされそ道の言ふあらすとそ是ふまま て過まこ傳ふこう道ふりといふ説さへ起社り此師此關と透過し一事一語徵を古ふとる其中或いを過不及なくしとあらされと一たひ此道開ゞてたそ是よ次

れていふ人も一人ときけき然
ても千歳のあらんといてん
過言ふ井似閑海北若冲野田人
今忠甫あ時て荷益田く春此學亦弘神代む
契沖の巻萬葉集を説密ふて過家学を
立の つ契沖の集を以て満亦神代る
も一の層登まく見ゆを立て此翁
とは一層登まく見ゆを立て此翁
す ふ北村季吟説亦た発て明り
所多

俳文

俳家奇人傳　松尾桃青芭蕉
の條云へる曰く古俳諧の連歌
波津の浪を「あ」い も て返る難
朝臣「みの」れ「ふ」藻を草に頼義
似た ふりけ廣き空ら ふ も
西す 行ふ星「う」海と ま
行 法師「深き」海ない か
法 師

離れて天下後世に称せらる
さ正風爰に大成
ふ諸中興の大祖と称譽せら
る い も宜ふ「榎本其
角」服部嵐雪其他著名の
子多 而て俳文の一体弟
実ふ之に至りて起さと云

狂言作者

聲曲類纂昔は浄瑠璃作者
と定まりたるは
の類文辞の巧なひ遊人た
歴をミて作らるを又おもれの
ふと作りめ花もぶ
有りと浪の俳れ
師井原西鶴と いふ諧
と ふけ浄瑠璃又凱陳暦
八島なつ作る其後
松翁出て、ふを作
作り始めて、専ら浄瑠璃
を近古に浄瑠璃作者

鶴と梅翁の門下に出来
阪談林の一人なり戯
作れ草紙多く行
る近松翁と其門人なり
云ふ

(古)今役者
座杉三郎右衛門と
久屋四九郎右衛門と
段くと上手の作者
京都左衛門太夫の
都直衛門藤の
の松門花
怨門左衛大阪
霊工夫門蛇壺
と成 ふ門 近
もて や 名
て 狂 言
人なり
言なり
なり
む
う
ら
今
の
は
二
番
ふ
は
名
狂
言
作
者
の
名
を
近
松
翁
出
て
、
専
ら
浄
瑠
璃
作
者
始
め
る
(中略)富永平兵衛右衛門
弥五右衛門と言ふ
花車形狂言作者
三番つゝき
二番ふは
五番は

其年暮に次て延宝八番附の顔見世達者故を書くせたり是まて
は作者名をのせ事ハなき
ふて右衛門達三郎左衛門金子
吉安世名所岡清兵衛と作
類纂江戸名所岡清兵衛と作
夫浄瑠理と清兵衛と
云ふ作と泉と
ふ金子と曲と
を云ふ時代作と
たひ金ひ時代作と
けるなり子と
ばなり渡をい
ば金つ
云邊平そ
ひの綱ふ
は程
やう
に
云
ふ
北
奈
川
清
兵
衛
作
と
金
平
節
と
て
享
保
の
頃
金
平
最
後
と
題
し
て
金
平
死
て
地
獄
廻
り
せし
事
を
ものせたり
評判あり
又金平蘇生
作を直ちて
再ひそ
やうや

萬國地理書

新井白石羅馬人及ひ和蘭人に萬國の地勢を問ひ采
攬異言を著そ是を我萬國
地理誌の始めなり

醫學

李朱の醫道其後一小穏重
を主とし其弊迂拘卑泥姑
息養癰に至りて享保
元文の際名護屋丹水後藤

良山の徒稍く復古を唱へ
是に於て豪傑迭ふ起り
而して和吉益東洞ふ至て
直に秦張に泝り面目
一変せられ武断も懲創
過き或ひ失そ
もの古法家と云
ふ（皇國名醫傳）

天文學

貞享の頃保井算哲貞觀暦
誤謬多し茂發見し新暦
を作り之を貞享暦と云ふ
次き中根元圭西川
如見の諸子皆ふ暦算に精
き之を以て著す

二十五百年代	将軍	年號
	吉宗	寛保
	家重	延享
	家治	寛延
	家齊	寶暦
	家慶	明和

復古學

二千五百年代の初めふ當りて物門の高足方よ盛んふ其説を鼓動し古文辭を修めて以く其枝ふ誇れり服部南郭高蘭亭餘熊耳宇灊水湯浅常山瀧鶴臺伊藤藍田亀井道載及ひ伊藤東涯の弟子青木敦書奥田三角武田龍等其魁たり此時ふ當りて古文辭を修めさるもれそ學士にあらさる如く思惟セられうりと云ふ盖し泰平久しく續き士よ常禄あり平居無事唯書を讀みて閲を消そ故ふ平易の文を記し説を述ふまそ世人の賞揚セさる所とふれり譬へも巧匠の數多れ木片を組ミ合ハセて器を作るう如し決して實

用よ益ふく風趣ふ乏しと雖も其手際こ俗眼を驚かうをふ足るものある故よ古文の解し難き文辭を蒐めて巧みふ之と用ひ以く其博識よ誇れり此學風天明寛政の項ふ至るまて江戸ふ盛なりき

文章家

然れとも古文辭を修めすして詩文と以く鳴るもれありて梁田蛻巖秋山玉山江村北海皆川淇園皆二千五百年代よありて前後著名の學士ふり

朱子學

物氏の學方ふ盛なるや中井甃菴三宅石菴等懐徳書院を大阪ふ開き朱子れ學を維持セり甃菴の子積善

安永	天明	寛政	享和	文化	文政	天保

積徳共よ豪邁卓犖よして物氏を排し益く家學を弘む然きとも此時の朱學なるそれ亦舊時の固陋ふ似さふふり積善曰く我學く林よあらそ山寄にあらす一家の宋學なりと積善逸史を著ゝし後世れ史家多く其慶ふ因る此時頼春水尾藤二洲柴栗山古賀精里皆宋儒を奉そ寛政中徳川政府古賀尾藤柴の三子を召して學政を司らしむ柴栗山五ヶ目と立て、士と造り祖徠の學を称して異端と為し之と抑排そ祖徠學のもれ大ふ怒り或ひそ龔撃セんとそはふ至る然れとも栗山亳も闕セそ之よりて朱子學再ひ起り祖徠れ學衰ふ其後よ至り松嵜慊堂佐藤一齋頼山陽長野

豊山安積艮齋の輩あり皆宋儒を奉そと雖も性理れ事よ於くそ强ひて主張セさるう如し徳川氏の文學之ふ至りて最も盛なり

折衷學

朱學の再興よ先ちて折衷學ふるもの起きり盖し折衷學とそ漢唐の註疏と取捨し宋明れ諸家の説を参酌して孔子の遺旨と尋ぬるを孰ふりと云ふ伊藤仁齋物祖徠等の宋儒と駁撃セしよま之を學ふ者則ち其非と知る而して仁齋祖徠の説又過激よ失するもれあま之と學ふ者則ち亦其非を知る是れ此説の發セし所以なま此説明和の項井金峨の始めて唱へし

所ふりと云へり然れとも金峨ハ井蘭臺の弟子なるて蘭臺朱學と信せそ金峨の此説を發する盖し時勢の既ふ熟そるもれあまと見えたり原雙桂梁田蛻巖紀平洲南宮大淑亦拆衷の説と唱へしものあり然きとも最も此説を主張し祖徠春臺等の説を駁せしものも金峨ふ如くハふし次きて山本北山太田錦城の二子奮起して之と唱へ最も修辞の弊と痛論し韓柳歐蘇を推して専ら清新流麗平散暢達と主とせり盖し古文辞れ弊と除きしは北山の功居多ふして經義の明聴まふりしそ錦城の功居多なる中井積徳大陜ふ在り文章を以て鳴る其後諸家と考證析衷をはを以

て世ふ著名なるもれ朝川善菴安井息軒芳野金陵の輩あり

和學

荷田春滿の姪在満其子御風徒と延きて敎授を従ひて學ふもれ極めて多し此時和學又復古の説あり加茂真淵荷田春滿ま従ひて學ふ大ふ復古の説と唱へたり和歌ハ萬葉集體と摹倣し文章亦古言と剽竊を國學者流翕然之ふ趣く祖徠春臺等日本と称して東東と云ふ真淵之ま激し以為らく我國固と神聖の良道あま陶虞三代の道入りしよりて良道泯ふと即ち儒學と仇視し力を竭して之を排撃セり其門藤原字万

佐樨取魚彦本居宣長橘千蔭村田春海等最も顯ま宣長博學ふして古事記傳と著そ其他有益の著書多し其弟子平田篤胤益く和學ま固執し儒佛を併撃せし盖し兹ま至りて僻見を免うはへからすと云ふ然れとも我國文典の開けたるて實ふ數子の功ま因ろなり伴蒿蹊京師まあまて専ら著作を事とそ卓見頗る多し村田春海加藤千浪其後江戸の二宗匠と称せらる春海心を漢藉ふ潜め加茂氏の道どすは所を信せそ思へらく我國太古道とすふ所ふし文字制度より衣服飲食等ふ至ろまて皆之を支那ま取る和學者なふものは儒ましく本朝の典故言辞ふ通そはもれふ

り故ふ周公孔子の道とする所の餘ま道とそへおぶし而して中古以来佛亦大ふ行ハ社士庶一般之を奉そ故ふ二道と捨ていて而して道を立はう我之伐聞うはるなま今れ和學者我邦別ふ道ふきき恥ち牽強附會妄りに我古史と引き人を欺き已を欺く云こ

俳文並ま狂文

二千五百年代ま至りて俳文亦大ふ進むものあり尾張の人横井也有（孫左衛門）鶏衣浦れ海等を著し一種の俳文を立てたり其体遥ふ蕉門の諸子ふ勝きて巧なゟ伐覺ゆ又東都まハ風來山人（平賀源内）蜀山人（太田南畝）六樹菴（石川雅望）喜三二（平澤天壽）等の才士出

て、自在に文章を舞し一
世を愚弄し且つ狂歌狂詩
等に新体を案出す其才驚
くべきものあり

小説

元禄の頃浪花に西鶴あり
數多の戯文を作り出たせ
しか多くは己が雅懐を述
へしもりにて小説にてあ
らず享保の頃京に江島其
磧ありよく世情ことを述べ筆
勢をさく近松に並にと雖
も小説家にはあらず其餘
行はれたるを浄瑠璃若は
歌舞伎狂言の繪本にして
見るに足るものにし文化
の頃に至まて江戸に京傳
あり天賦の才資を發し専
ら想像を畫きて人物を作
出し終に小説の基礎を立
てあり之に次きて馬琴出
て更に練磨の功を積みて
大に人情を適合せしめた
り其脚色は京傳に及ハさ
るこ遠しと雖も其体を備
へたりと云ふべし時に柳
亭種彦専ら草雙紙を著て
し婦女の閲覧に便にし為
永春水新に人情本を作り
脚色に意をそ言語を旨と
す式亭三馬滑稽を以て著
はる文學茲に至まて始め
て見るべし

漢方醫學

古法家の末學流を承け徒
に言筌を守りて其弊攻下
遂投人命を草菅をはに至
に是を以て天明寛政の際
京師に福井楓亭荻野台州
和田東郭諸人あに江戸に
多紀藍溪櫟蔭兩先生あに
精心覃思古今を折衷し温

涼と補瀉し偏執そゐ所に
し從前の陋弊一洗して殆
んと盡く（皇國名醫傳）

西洋醫學

和蘭の學亦此時に至りて
開け前野蘭化杉田鷧齋桂
川甫周長寄の通辭に就き
て和蘭の解剖書を講究せ
り又宇田川榕菴と共に藥
剤書を講究せり

理化學

青地倫宗氣海觀瀾を著し
宇田川榕菴舎密開宗を著
せり皆實驗に基きたるも
れうして今日の學者猶之
に依賴す

天文測地學

麻田剛立皇暦學を好み晝
は書を讀み夜は之を天に
驗し合せさゞもれあれち
悉く其書を捨さ別に術を
索り研究九年大に其法を
得たり然して後十餘年間
凡百の測驗毫も違ふこと
なしと云ふ其後清商西洋
の書を船載す其説剛立に
發揮し所と符節を合す
が如しと云ふ間長涯從ひ
て學に大に補翼する所あ
り伊能東河亦天文學を以
て大に趣る高橋東岡と見
そ西洋の暦法精確取るに
と知り悉く舊學を棄て
て之を學ひ發明する所多
し而して最も推歩測量に
精し書き著して磁石極の
動くことを辨ず

狂言作者

大戸さの川のといい北中たい中簡思屋爺を平とゑ古
阪ふセ作家贔いふ濱引三ひ田ふ付德ふ出記いて今
ゐゐて者の員ふ呼り受右｜嘉ゑ入兵な｜のふゑ役
てあ見ふ藝大狂へ上々衛ゑ右及く衛ゑ曽は名江者
ゑゐやとと入言工町て門今衛ひみと十我ん作戸大
並べうて成大を夫組狂とは門かた名郎の中頓ふ全
木きとあた評あをふ言て嵐俳ふゐを助五へ作津ふ
總かいてを判みは勝を座新名｜他變成郎於れ打曰
助先ふう（中今）北けた仕本平猪大國へかう花一治く
はハ時ふ畧ゑう黒さくのい同阪のて平國半流兵近
ゑ京江て（今）姉ゑ船ゑみ最まとふ了の野姓七太衛来

らゑ昔の様ふ引受けてゑ
かてんゆうゑ」

（聲）曲類纂竹田出雲清定ゑ
寳永二年酉三月竹本芝居ゑ
の元ふり享保作の頃其佳ゑ
座ら浄瑠璃を享保ゑ
自称ゑは璃を享保ゑ
小雲清頗るの多｜男
作出（假）定ゑ
りと雲名ゑ
出ゑ手云本忠臣藏の狂
言ゑ本三忠好松洛並
ふ木千ゑ人臣作る呼
千ゑ出に来て十月大
言ゑ抑三世十年丑ふ
ふ木千ゑ出に来て十月大
ふ村て代助の人阪以前豊竹享保越前形切宗忠臣金助
狂座作名狂の短吾妻雜て木栗横山助同時丈
言ふゐを言作冊妻雜て木栗横山助同時丈
にてう出にゑと雜て木栗横山助同時丈
大鎧へ｜ゑて大小並ハ岸良之助中ふ
岸櫻同々大小並ハ岸良之助中ふ
宮故せゑ岸栗木切座年江春戸
内郷年茂由横宗ふ丑ふ
の錦卯江良山助忠て十
役と春戸之の同臣
澤い中ふ助時丈金伶大

又村ゑ談郎中七十大ゑ元藏大二嵐ふ以賀ふ作る
ふ神源廢来三月阪の年作繁郎十村勤大市此宗
｜霊内る操五朔竹浄辰意昌大七条る岸村年十
て矢もゑ歌郎日本瑠ハのセ岸本太其宮座津郎
世口亦な舞座ゑ座璃月狂り宮外郎後内忠打勤
上のた｜伎興ふふ出假言元内題座延の臣治る
れ渡浄福座行歌て来名ゑ来のゑゑ享役藏兵之
行｜瑠内と｜舞勤ゑ手ゑ澤役ゑて四坂い衛を
れ尤璃鬼も夫伎め本と村を澤大年東ろの始
ぬもを外ふゑ芝同忠寛訥勤村矢京彦は作ゑ
佳作（平今）ゑ居十臣延子め宗數都三軍ゑす

表中遺漏尚ほ多し後の人此書を以て棄つべからそと爲さゝ希くは裨補せよ

以上の二表ふ據るふ德川氏の時文學の進歩と貨財の進歩と併行せしこと茂知るべし然きとも其間貨財先づ進みて而して文學之ふ續きしものきあゞ文學先つ進みて而して貨財之ふ次きしもあり又其時代ふ就きて考ふるふ貞享元祿の時代まてそ其進歩の勢最も速ふして其以後少しく遲滯し又更ふ文化文政の項ふ至るまて次第に增進の勢を示すも蓋し社會事物の整然として一列を爲すて進行すふい社會の理ふりと雖も其細目ふ就きて查察をゝ未た必そもも小遲速なくんはあらす然きとも此事獨り社會の理ふ於てのみ然ふふらそ凡そ外物の理を仔細ふ講求せそ皆此の如きそのあゞ夫れ惑星の大陽を廻ゆて遠心力と求心力との關係ふ出けるものなれそ其行道も必そ眞圓を爲すべしとおそ思ふふべゝを然ふふ其行道全く楕圓を爲せり燈火の滅するふて油の盡くるふ因るまれふれハ次第ふ暗くならんとおそ思ふふべゝ然ふふ其滅するふ臨むや却て明光を發せり斯の如き類れ事物理ふ於て極めて多し皆力の一樣ならそして遲速强弱あるに基うさるを得す然らは則ち社會の進歩も社會れ理ふりと雖も其進歩ふ緩急遲速あふゝ勢の免きさる

所なるべし是れ則ち德川氏の時貞享元禄と文化文政との時に於て最も隆盛を見る所以ならん然れども其全体の成跡を顧みれば足利氏季世の淺まし〻き有様よりして德川氏の燦爛たる開化を發きり社會進歩の理亦明らかならずや蓋し此等の進歩は常て政府の保護と因らず又常て外國開化の助を藉らず全く日本社會の内に於て自ら進みしものなり後の世の國事を憂ふるもの此二表徴熟見せざる或べからず干渉保護の迷を解うん歟

蓋し二千四百年代の進歩は人目を燿爍たるものあり儒者に於ても其俊才ある熊澤了介、物徂徠、新井白石等の人あり俳諧に於ては其巧妙ある芭蕉其角等の人あり佛に於ては其深奥なる深草元政の如きあり狂言作者に於ては其新機軸を設けし近松門左衛門岡清兵衛の如きあり浄瑠璃に於ては初代團十郎の如きあり即ち竹本義太夫の如きあり役者に於ては長く後人の尊崇を受くるの人なり其貨財上資あり長く後人の尊崇を受くるの人なり其貨財上の進歩も極りて著しく共に前表に就きて見るべし蓋し二千四百年代の進歩は我國戰國の為めに久しく壓下せられたる文運の太平の時雨を得て俄に勃興したるが如き勢を示すものあるが如し二千五百年代の初めに當りて此等の諸子死亡の後は文運稍遲滯の姿ありと

雖も其末ふ至るゝ及ひて更に駿速の勢を以て第二の進動を現せり儒學ふ於てハ早く析衷ゝ學出て舊時の固陋ふゝ諸説を排除し終ゝ山本北山太田錦城中井竹山佐藤一齋賴山陽安居息軒の輩見識と文章と以て一時を風靡するものあり和學ゝ於てハ加茂真淵本居宣長村田春海の輩あを古代の事實を探くり語音を正きり天文學ゝ於てハ麻田剛立伊能東河金子半七郎の輩ありて深く天空の外を探くふ小説ゝ於てハ京傳馬琴ゝ出て文筆の巧技ゝ誇きり俳文ゝ於てハ也有狂文ふ於てハ風來蜀山の輩あを て一種ゝ新文体起ゝ皆博識ゝして新機軸を出きし人なり其他貨財の進歩せし

もの亦極めて著し今特ゝ此等の人物ゝ就きて品評を下さんふ讀者多くハ二千五百年代の諸士を以て二千四百年代の人物ゝ劣れりと為さん歟是ハ蓋し其事業の人目ふ著しきものあるか為めなを開化の度ゝ至りてハ二千五百年代を以て優れりと云ハさるへからす蓋し二千四百年代の諸子ハ皆創業ゝ人なり其爲ハ所多くハ文學上の撰乱反正ゝものふり故ふ功名人目ゝ著し二千五百年代の諸子ゝ至りてハ其餘を受ケて其弊を去り其美を勸め以て能く社會ふ適合せしめたり故ゝ其功名前者ゝ及ハを雖も其智識ふ至りてハ遥ふ之ゝ超ゆるものあを と云ハさるへからす殊ゝ小

說俳文其他此時代に至りて創業せしもの極めて多し文運も決して退却せしふてあらはるなを抑も文明上の人物を論ずるに時と一枝の優劣に就きて査察せさるへからず然らは則ち二千五百年代の人何ぞ二千四百年代の下ふあらんや斯く一般の進歩に就て査察したるの後更ふ其開化の性質を略記すへし蓋し以上の開化も皆封建制度の下ふ發したる開化ふり故に封建制社會ふ適するふ形狀を存せり今其理由を述へん抑も封建社會に於ては大國淺領なる所の數多の諸侯あり其次ふ數多の階級を成ふ所の武士あり其下に於ては商あり工ありて農あり農と工とを固より貧困の種類ふして

諸侯を固より殷富の種族ふり其中間に立つ所の士と商とを其階級極めて多くして富めるものは王侯に比へ貧きものは農工よりも下きり抑も德川氏治世の文運を斯る種族の需要ふ基きて世に現はるゝ所ふれを其度に相懸隔をる亦極めて多し故ふ其讀書に於てふや王侯富豪は古聖賢の名に眩し專ら學士を引き孔孟の書を講せしめたるが為めふ六經に明らかなる徂徠仁齋北山錦城一齋等の如き學士代輩出せしめたりと雖も中等以下の人民を之を以て產を破るの基と爲し固く之を禁め僅に商賣往來都路今川の類を以て其教育に充てをり其和學ふ於けるや王侯富豪と古代

の語を貴重し學士を引きて專ら古事記萬葉集等を講
セしめたるを為ふ古辞に明ふる真淵宣長の如き學士
を輩出せしめふと雖も中等以下は人民々百人一首
を以て極度とせり其文章に於ける王侯富豪々專ら漢
文を重んじ古辞を解するもの代称揚せらるゝ明
らふる徂徠南郭の輩を現出せしめたると雖も中人以
下まで之を解するふたふ能わざりき其和文に於ける王
侯富豪々古事記あるを以て奇古なる語を用ひて文章を
綴るを博識とせて尊崇せしうて之に巧みなる真淵宣
長の如きを輩出せしめたりと雖も中等以下は平假名
は草子に安んせり其画に於ける王侯富豪は賞觀玩味

して始めて能く其趣きを解するべき氣意あるものを好
みて南州の画專ら行はれ之を能くするもの池大雅の
如き代現出せしめたりと雖も中人以下は錦画を以て
其樂と為せり其書法に於ては王侯富豪も唐様を重
んじ之を能くするは廣澤東江の如きを輩出せしめたり
と雖も中人以下は皆御家流を用ひり其器具に於ける
る其居宅に於ける其服飾に於ける其他一切の開化に
於けるも王侯富豪の用ふる所は其度極めて高くして
而して中人以下の用ふる所は其度極めて卑し特に其
度の懸隔せるのみならず殆と性質を異にせり蓋し社
會の平等ならざる社會の常ふれども尊卑は用ふる所

相異ふるを固より免かるを能はざるとも封建の時代如く甚しきあらざるに而して封建を以て太平を致せり事徳川氏の如きを古来各國稀に聞く所なりとす苟も封建の組織に於て如何程に開化の發現をなすやを詳ふるは徳川氏の開化を査察するに如くなし今や此の如き學士を發生せんと欲するも望むへからず此の如き器物を發生せんとするも得へからず開化の理伐窮めんと欲するもの其然る所以に於て最も注意せざるへからざるなり

且つ更に注意をへきは一事あり封建制度の下に於て發するものは皆封建の性質を稟くる事是なり蓋し酒

中に注きたる凡ての米は皆酒と化するに磁石に接するは凡ての鐵は皆磁石鐵となるが如く封建制度の下に發するは凡ての現像は皆封建の性質を得試みに見よ徳川氏の内制は各諸侯の内制と全相同し各諸侯の内制は各藩士の内制と全く相同し各藩士の内制は各商賈の内制と全く相同し各商賈の内制は各伴頭の内制と全く相同し是より以下連綿として皆同し皆僕隷家族を重んずるに外ならざるなり故に長子を重んし庶子を軽んし假令継嗣に愚者あるとも雖も綿々として一族を以て永遠に傳へんとの計畫極めて密なり其極や其族

の血脈全く絶ゆゝと雖も尚ほ養子の法を用ひ外面ふ於ては更ふ絶えさゝか如く思ふ者むるものなり是迄固より人の天性(避死保生)ふ於て此の如きを欲するもの有るに基くものふして封建制度の下ふ至りて非常ふ發達をふるもの之を云ひさるへからず後の人仔細ふ之を玩味せゝ社會ふ一定の理あるて種々の制度の下ふ種々の作用を為すことを了解するに難からさるべきふ封建ふ族を重んぜ故ふ家康の臣ふ直政忠勝等あり之と雖も其關係を家康と直政忠勝とに間ふ存せ故ふ家康ふ德川氏と井伊氏と興へたる恩義を直政忠勝ふ受けさるを得ふして直政忠勝等ふ井伊氏本多氏の間ふ存する故ふ家康ふ德川氏本多氏ふ對する關係こそ以前ふ變ずこと無きを得ふして其家を繼ぐふ至る迄此事凡て他の諸侯ふ於ても皆同し君臣父子其他親戚の關係ふ至るまて皆人と人との間ふ結ぶ族と族と族と間ふ結ふものなりされも商人も亦族を以て諸侯の出入となる伴頭も亦族を以て商家の族伴頭とふるなり其他學士醫士役者職工藝多等凡て皆會ふ立てり

以上述ふる所の事實ふ據りて推論をはふ凡そ開化の進歩たるや社會の性なること我知るべし譬へゝ王朝の時の如く門地の貴賤を論ずる弊甚しきとなる各地封建の勢代發して以て自由を求め足利氏の季世ふ如く封建戰國の禍亂ふ陷きゝ終ふ集合して太平を致さんことを求め既ふ太平を致すに後ゝ文學より技藝すり凡百の事ふ至るまて皆進歩せしめて以て人々の生涯を快樂ふらしめんことを求む社會の動く所常ふ

此の如し英雄豪傑の為そ所或そ其勢を早め或そ之を
遲延せしむるふ過ぎさるなを嗚呼此理を推して將来
を察せそ我國前途の事亦豫知そは事を得へさるう
且つ夫れ社會の發達い他の有機諸物の發達と異ふら
す今草木ふ就きて之を例せん抑も草木の性をは又保
生避死の天性を存すふう爲めふ其生長そるや疑ふへ
うらすと雖も之と養ふ種々の方法ぞ以ちをは以て
堅靭ならしむへく以て柔弱ならしむへく以て長大ふ
らしむへく以て矮小ふらしむ亟しく之と同しく社會開
化の發達そるそ社會は性なを雖も之を養ふふ王朝
の制度を以てそると鎌倉政府の制度を以てすると德

川政府の制度と以ちくすふそふ因りて文學貨財より風
俗人情ふ至りまて皆異様の稟性を得せしめたり是ま
由りて之と觀りふ社會の制度を立つるもれく恰も園
丁の草木を育そるう如き歟嗚呼如何なふ有様ま於て
草木最も長すふやを知らは社會發達の如何なふ制度
の下に於て最も速ふりやを知りこと難うらはりく

第十三章　徳川治世の間勤王の氣は發せゝ事

我國開化の斯く進歩せゝ際ふ於て德川政府の為めふ不利ふゝ一元素の發達し来ゝるものあゝ其ハ如何と云ふゝ王室を尊ふの氣風大ゝ増進せし事是れゝ蓋し德川家康の禍亂を戡定せらるゝや深く王室の將来ゝ懼ゝるべきものゝあるふゝ我知らされゝ表面ゝハ之を尊重ゝるゝ如しゝか如しゝと雖も内實ゝ全く之を抑へしゝるゝ固ゝり戰國潰爛の折ふ比すれゝ王室ハ一唾れ勞も自らせらきゝゝして衆庶の尊崇と受け數多れ俸須をも得玉ひし事なれゝ幸福れ度ハ天壤啻ふらゝと雖も人智漸く古来の歴史ゝ是非ゝるふ及ひ德川氏ゝ萬般の政務を親らし王室ゝ全く虚位を擁ゝるゝ如き姿あゝれ見て王室を舊時ゝ復せんとゝる志の發するゝ人情の常なり是れ家康の豫め防かんと欲したゝ所以ふゝ然れとも此心の進歩ゝふ又一朝一夕の事にあらさりき彼の二千二百九十七年德川三代將軍治世れ時肥前島原ゝ耶蘇宗の亂あゝ其張本たゝるゝ素と大阪の殘黨ゝして初めゝゝを德川氏の政体を破壞せんとゝの精神ゝ出てたゝるものゝふゝと雖も其口ふ藉きて以ゝ人心を固結せゝ免んと欲ゝる所のゝの即ち勤王ゝあらゝして耶蘇宗ゝあゝ其ゝ姦雄の士其志の成らゝれゝ憤り政府ふ向ひて干戈を試みんと欲ゝるものは必ゝ輿論の

投ぜへきふ投すべ〳〵若し夫れ當時の輿論果して勤王ふ切ふきを何そ敢て之を口ふ藉かさらんや然るふ其茲ふ出てすして耶穏宗ふ據る以て當時勤王の説世上に洽うらさるを知るへし其後十四年を經て二千三百十一年ふ至りて由井正雪丸橋忠彌の亂あるを正雪固より死を恐れずして臭名を萬世ふ傳へんとすふをのなれを若し夫れ勤王の説ふして當時ふ感ふらんふを何そ之を口ふ藉きて人心を固結せしめはることあらんや然るふ其口ふ藉く所のものを之ふ出てをして却て德川氏の親藩紀州公れ謀反ふ詑を是れ又以て勤王の説未た感んふらはるを知るへし然るふ其後太平

久しく打ち繼きしふは當時の世体ふ最も必要なふ教則訓言の自ら發をるを自然の勢なを德川政府の組立を封建制度なを封建制度を破るものを不忠れ心なを故ふ忠義の教太平れ久しきふ從ひて社會ふ發成したり漢學の旺盛ふ至るふ及ひて其碩學鴻儒愈ふ之を鼓舞ちるり蓋し孔子の教を素より封建の時ふ發したるものなれを其君臣れ分義を説くを恰も善く當時社會の結構を鞏固ならしむるふ適をはものあを加之物ハ見るへの地位ふ從ひて異なふものなるを德川時代ふ行ふれたふ孔孟の教を忠義の事ふ切なること却て純粋なる孔孟れ教ふを甚しふものあはう如しされを

其所謂忠ふるものは君に為めふ其身を顧みさるに
ゆり其所謂孝なるものは父の為めふ痛苦を厭ふさ
るの謂ひなり蓋し是を中庸を得たるものあらん
るへし然れとも封建制度を維持するを以て全く此心
ふきを時世の移るふ従ひて此心愈々感化ゆりき然り
而して英雄豪傑に士大ふ此心を鼓舞するのなるに
あらす二千三百五十二年の頃水戸黄門光圀大ふ此氣
風を鼓舞せり蓋し光圀の主義たる王室を尊崇し皇統
の正經を立て佛教を排し臣民の分義を明らふすふふ
あを故ふ大ふ我邦の古籍を集め以て大日本史禮義類
典の類を作らし免又朱明の遺臣朱舜水を重聘して漢

籍を勧め孔孟の儒道ふ據をて頻りふ忠義の教を奨勵
せり然り而して最も社會の人心ふ大感覺あをたを楠
氏の墓を湊河ふ建て嗚呼忠臣楠氏之墓と記せし事ふ
り是ふり先き楠氏の名望未た世ふ顯はを唯一二の儒
者舊史を讀ミ其事跡を見て之ふ欽慕をるあるのみ然
るふ光圀の楠氏ゆ墓を湊河ふ建てしよりを村童牧兒も
楠氏の人とふりを知り勤王を人事の最も榮譽あるも
ゆしふ事ふ解せり其後久しうらを二千三百六十一年
ふ至り赤穂の臣其主の為めふ怨みを報せし事あを其
事情の憐むへきと其進退の整備をるとふ因りて海
内一般其人とふりを慕へり俳諧師を俳諧を讀ミ戯作

者と忠臣藏を作り儒者々義人録を著し歌人詩人各〻其長そる所を以て其行為を賛美せり而して忠義れ行ひ社會ふ尊ハるゝ時代なきそ世人皆其刑ふ處せらるきたる代惜まるものふうをき此時代の前後ふ當りて彼の德川氏並ふ諸侯の内部ふ起りたる騒動も大ふ忠孝の氣を鼓舞せり夫れ亂臣賊子の君家を亂るい實ふ封建制度を破潰そはそのれり故ふ封建制度の時ふ當りて大逆無道として非斥するもれ之ふ過くるふし彼の姦計を企てそふ惡人等々世人舉りて之と惡み其騒動を静めたる忠臣々世人舉りて之を賞したまそ社會の風教そ愈よ封建制度ふ適し

て發達せり

此時ふ當りて更ふ其勢を助くるもれあを演劇淨瑠璃小説等の盛んふ世ふ行ハれし事是なを是等のそのを固よを當時社會れ風教ハ變へんと欲するれ卓見を以て作り出せるものふあらす全く社會の風教を其儘ふ寫し出せるそのとして見るへきふらんはまそ其所謂勧善懲惡の主意たる一ふ唯當時ふ行ハれるる世論を示そふ過きすと雖も忠義の氣益く勧むもものあるなり其記そる所を見るに上を王室將軍諸侯の事より下ハ武士商人等の事ふ至るまて必そ臣僕の内ふ惡人あを て其主家を覆し主人庸愚ふして而もて後忠臣出てい

數多の痛苦を嘗め其主家を改復したる此歴史なり大凡世人の感覚を發揮するもの此等の著作より甚しきはなし此等の著作を見聞するものは皆其惡人を見て憎み其善人を見て憫み切齒扼腕するに至るその多し當時の著作をは惡人を非常の惡善人を非常の善として共に人情に近うしらすと雖も當時の人情又粗なるふるを能く之を感奮せしめ得たりと見えたり

されを社會に行はるゝ輿論を常に英雄豪傑に首唱になるう如しと雖も其實を當時の一般人民に利益あるそのほ外ならさるはなり忠義の教何故に利益なるし乎是れ則ち當時の制度を封建制度にして君臣の關係を以て社會を立てたる折柄なれを忠義の教を最も之を維持をはふ適すれをふりされを彼の勸善懲惡は世の教の如きも必をしも聖人の作りたるものにあらて愚夫愚婦の輿論集まりしもれと思はる

斯く忠義の說社會に發揚するに及ひて大に德川政府の封建制度に衝突をされ結果を發せり何んとなれを我國に於て忠義主義の最も大なるものを德川氏に盡をふあらすして王室を尊ふるあるにとを歴史の明らなるに從ひて一般人民に知らしたれをなり彼の光圀あるもれ固より人心をして德川氏に叛かしめんと欲そるの意あるにあらず蓋し君に忠を盡すれ善事たる

を知り而して人君の最も貴きものゝ天子より超ゆるふ
さを知る故に忠を王室ふ盡せしその伐尊ひしるり赤
穂の義士の行為の如き其他演劇小説に記載する忠義
の士の行為の如きゝ皆其君ふ忠れるものなり其君に
忠ふれゝ封建制度ゝ鞏固なるふゝしと雖も其君れ君ふ
忠れるゝ其事竟ふ如何ふるゝきや蓋し忠義の教愈ゝ
社會に著しれ古昔王朝の盛んなりし歴史愈ゝ人智ふ
顕そゝいとなは其所謂忠義の氣ゝ其君に於てせそし
て君の君に於てすふの正理ゝる事を思はしむゝ固
よゝ理學の上ゝ論するときゝ其君れ君するものゝ
全く我ふゝ因縁ふきものなるゝしと雖も人情の感觸

を決して然らさゝふり且つや人類貴賤の考ゝ大ふ其
勢を助くるものあゝ蓋し人情の尊敬する所ハ親しう
らぬもれふ發するものなり抑も賢不肖の差ゝ左すて
甚しきものゝあらされゝ相親ちむとなは尊しと思ゝ
ゝ程の人ゝあらぬものれもゝ其名聲を傳へ聞き
て親しく交ゝ事のならぬときゝ奥床しく思ひれて自
ら人をして尊重の念を發せしむるものふり（貴尊の念又生を保ち死を避くるの天性より發する理由ゝ第四章卅四葉に詳なり）されゝ王室の平安の
都に在して凡て世間の政務に關係し玉ハす深く隱退
せられゝる有様ゝ最も世の尊信を誘くの源因となれ
ゝ殊ふ神代荒蒙の時より連綿として正經を傳へ玉ふ

こと當時の歴史に明うなれと我日本に天子のもれなり普天率土王土王臣ふあらはるなし中葉頼朝等黠猾の才を以て王權を攘み終ふ將軍政府の基を立てたるに雖も真正の神權と王室にあるとの考へ漸く人民の間に發生せり

此事の第一の源因を和學に漸次ふ開々て神道の隆盛なりしふ始まり蓋し神道の説たるや王室の衰へ鎌倉政府興立の頃より以て体裁を為すに至れり後鳥羽院の時（十九百年代の中頃）卜部兼直神道大意を著せり其後度會家行類聚神祇本源を著せ南北朝の戰爭に時北畠親房元元集及ひ神皇正統記を著せ是ふ於て乎神道稍く形体を為すに至りぬ其後足利氏より戰國ふ移りて神道全く衰ふ書の見るへきふしなし徳川氏海内を静定するふ及ひて儒者ふして我國の古事に注意をるその兼ねて之を研究せり林道春山崎闇齋新井白石の輩皆著書あるを而して闇齋の如きに深く之を信せり然り而して和學者真淵本居平田等の諸子又熱心之を主張し我國を神國ふたて神の御子孫なる天位に登り玉ふ世界無比の尊き國たること代人々に知らしめたり斯く神道に進む に従ひ皇統を貴ふの氣從ひて盛んにふれり宗門に熱心するもの何そ理論に關せん我皇室の御祖先ハ神ふりしめ一論ふ迷信して勤王の氣又之より發生せりさ

れ〻忠義の氣まりもて終ふ勤王の氣を發生したり此氣漸く鬱結し終ふ高山彦九郎蒲生君平の輩ふ至りて最も王室の凌夷を歎き諸侯ふ説き士民を鼓舞して身命を顧みざるの熱心を示せり

二千五百年代の末に當りて儒者中又大ふ此の如き議論を主張したる者あり其人誰とそる賴山陽則ち其人なり蓋し山陽の主張せし所と神道と其主義を異にして却て神道を駁擊ふ力り然るも其王室を尊崇そる ふ至りてい遥に之に過きたり彼れ新井白石の讀史餘論を讀み皇朝の衰へ武權の興立する所以を知り頻りに之を慨歎し又楠氏の勲功を賞讃して其業の終に成らさるを哀み德川氏の政權を擅ふし王室の虛位を擁そるを以て時勢の止むを得さるものと言ひぬそうふ論したり蓋し新井白石と古来の俊傑にして能く開化の理を知れるふ故ふ古来政府の興廢する理を説きて德川氏を經緯せんとせるふ力り賴山陽い即ち其事實ふ依りて更に勤王の主義を説〻を識者或そ其行為を咎むと雖も亦一世の俊傑と為さゝはを得そ況んや日本外史の一たび世ふ顯はしてを海内一般勤王の義を知り志士靡然として之ふ向ふの氣を發揮せるふ於てをや真に山陽外史の著書れ如きと海内の人心を鼓舞せし事古来無雙と云ふへきふり著書を以て人心

を鼓舞するを得る此の如きに至るまでは蓋し又時世の隆んなるに因らずんばあらず

然るに此時に當りて所謂勤王の氣なるものは亦た以て徳川政府の結構を破壞するの勢力あるまでに至るべきあらざるべからず然るに不慮に事件發出せり其を何ぞや二千六百年代の初め（二千五百十三年也）米洲の黑船太平洋を越えて我浦賀に著し通商貿易を請求せんこと是なり是より先き外國の通商を三代將軍の時より固く禁止せられたれば海内一般殆んど日本に外に國あるを知らざるなり而して唯其名を聞くのみ支那朝鮮琉球の諸國に隣りする彼の佛祖に本地を天竺の如き

或は天空の外にあるを思惟せし者なり此時に當りて外國數々我邊海に寇せざるにあらざるに二千五百年代の後半に至りて外船の我近海に往來するの數々ふるまでに然るに皆我邊僻の地に上陸するのみにして故に唯當時遠大の志あるものをして之に憤怒せしむるに止まり然るに米船の我に到るや其入るに所を則ち江戸近傍の地なり其求むる所の則ち條約を結びて通商せんことを請ふにあり事大に前者に異なれり而して彼れ之を要求するに強迫の意を以てし若し之を許さゞれば直ちに兵力に上り訴へんと欲するに威を示せり

此の如き人民に對して此の如き事件の發するは最も其膽を破るに足るべきものあり王室に直ちに巫祝僧侶に勅して外人の退去を祈らしめ幕府に直ちに炮臺を品川沖に築き諸藩に令して武備を嚴にし且つ其の得失を建議せしめ加之洋語に通ずるものをして外國の事情を質さしめたり

蓋し深暗の中にあるものをして忽ち光輝を見せ直ちに眼を開く能はざるが如し彼の太平洋中に最小なる一孤島の内に閉居して絶えて海外異邦の人と交通せざりし人民にして此の如き事變に逢ひ其心神の惑亂せるを抑も又理なきにあらざるべし其第一の恐懼は外國と交通するとなる彼れ直ちに我國を奪ふべきにあり蓋し愛國の念は國に關する事件の生ずるに發するものなり忠君の念は君に不利なる事件の萌すに時に起るものなり今や外國將に我に交通を求め我國を奪はんとすれば恐き人心に發し憂國の心非常に鬱勃たり蓋し人心は其自ら苦しきを忍ぶに切なり自ら慰むるに敢なり其自ら恐るゝときは切なるに自ら強さを如く云ふにそのあり其自ら危きを覺ゆるときは切なるに自ら尊大にして他の強者を罵詈するものなり彼の外船の我國に入るや其船艦の巍然として大なるに其砲銃器械は整然として精なるに其兵制進退

の嚴然として靜うする固より以て我國人を懼るに足む
るふ足るそのあるを我國は船を片々たる小舟のみ我國
の砲銃と火縄銃のと我國の兵制ハ二千三百年即ち元
亀天正の頃はものゝみ故ふ如何ゝ我を彼より强しと
もて自ら慰めんと欲するも一も之を慰なへきを此點あ
るなゝ唯一の慰むへきと當時盛んふ發達をゝふ日本
と神國ふり日本は天子を神孫ふり夷狄禽獸と同しう
らそゝの一事ふ有るを水戸の會澤正志著新論ゝ曰く謹按神州者太陽之所出元氣之所始天日之嗣世御宸極終古不易固大地之元首而萬國之綱紀也誠宜照臨宇内皇化所覃無遠通矣而今西荒蠻夷以脛足之賤奔走四海蹂躪諸國恥視跛履敢欲凌駕上國何其驕也地之在天中渾然無端宜如無方隅也然凡物莫不有自然之形體而存焉而神州居其首故幅員不甚廣大而其所以君臨萬方者未嘗一易姓革位也西洋諸蕃者當其股脛故奔舶走舸莫遠而不至也當時此類の文詩極めて多し

斯く民間の志士う熱心國事を憂ふふ當りて德川政府の大權は二百六十餘年間太平は夢を結ひたゝ王侯貴族の掌握せし所ふりを彼等と固とより最初德川政府と創立したゝ勇猛ふゝ參河武士の子孫ふりと雖も德川政府の太平ゝ彼等をして其精神ゝ身体ふ至ゝまて全く柔弱ならしめたゝを其の平生交ゝ所ハ多く下臣のみなるを以て外國の使臣ふ對ゝるも敢て怯臆すゝことふく或ゝ能く之を叱責すふの勇氣を有したゝ者あゝ〳〵然れとも此輩固より外國交際の何ゝの事を知らはゝなを海關稅の何ものたゝ我知らさゝ

れう裁判權の何ものぞを知らざるふり通商交易の如何なる利益なるものたるやを知らざるふりをして故ふ弟一に開きたる談判を談判ふあらずして寧ろ説諭を受けしもれるり今之ふ抗せんとせんと兵力は勝つへきなく辨論の勝つへきなし之を諾せんときんか人民の怨怒せんことを恐る是に於て徳川政府の企てたる第一の策を當時大に尊信を加へたる所は王室の威を藉り天子の詔を以て開港を行ひ以て一に人民は怨怒代鎮め一に外國の督促を緩ふせんと欲するふあるを従来天子の詔ふ常に徳川政府の欲をはまふくなりき然るふ此の如き方略は民間ふ傳播するや志士皆怨怒し慨歎の餘り「寶刀難染洋夷血」と謡ふものあり「此心扁欲掃戎夷」と唱ふるのあり「今まして尊攘を議せざるものと國家の奸賊夷狄は醜奴のみ」と論するものあり其極や殆んと全國各藩の志士は憂愁胸に迫りて家を捨て妻子を去り郷里を脱し生死をも顧みず嚴罰をも恐れず東西南北ふ奔走して偏に其熱心なる所の攘夷の一論を徹せんと務めたりされど其論又縉紳の内ふ入りて王室の主義全く攘夷と決定せり而して徳川政府を之と翻さんと欲して幾回とはく開港の議を上りたるとも終ふ其意を達する能はざりき

是時に當りて徳川十四代の將軍家茂尚幼にして一切

の政權皆大老井伊直弼の手に帰し此人王室に説くに為すべうらはる我知りはをとて鎖港攘夷に迎も行ふ色うらきふを思ひまゝに王室の許さゝるも吾能く之を決行せん諸侯の服せさるも吾能く之を壓服せん民間の志士の罵くそるも吾悉く之を鏖殺せん今日に日本我處をるに唯此一方ふあるを決断し終に外國と假定約を結ひたるに實に二千五百十八年なり

天下の志士ハ此舉措を見て皆悄然として恐れ忿然として怒りて曰く德川氏と吾人をして外國の奴隷たらしむふるのふり天子に命に背き日本國を陸沈せしむるのなりと罵然之を非難して皆心を王室に帰せり

直弼誅して之を知り乃ち一網に打盡しうるは世論益々之を怒り二百餘年人望の係をし政府も復一人の之を慕ふるなきに至るに實ふ開港に止むを得さるを知るの俊士と雖も亦之ふ服せさるその多うきこと此の如き時ふ當りて此の如き舉動を行ふ人の良死を遂ゝさるを社會に理なを故ふ直弼遂ふ一私怨の為めふ水戸藩士の手に死せり然れとも彼既に德川政府と一身とを犠牲にして外國と條約を結ひ以後如何ふる鎖港論者の政權を執るも容易ふ之を決行をる能ハさらしめるに蓋し亦國家ふ大功あるを云ふべし是より先き天下の諸侯及ひ志士を德川政府の終ふ頼

むへうらかと見て皆悉く王室ふ向ひ之ふ據りて以て
鎖港攘夷を行ひ我神國をたて夷狄の奴隷たるを免れ
ちめんとせり是ふ於て直弼等私ふ思へらく德川氏の
人望を恢復し海内をたて靜寧ふ歸さしむるは唯こ公
武をたて合体せしむるれ一事ふあるとと則ち皇妹東下
の議を奏せり直弼死そるの後老中等庶政を一新し諸
侯の妻孥を其國へ歸し且つ公武の合体を希望し終ふ
將軍をして上洛せしめ諸侯を京師ふ集め天子れ目前
ふ於て開鎖の一論を決せんと企てたり
若し之を行ふの人として賢良れらんまい斯の如き企
てそ當時ふ於て或そ適合すはものふらん然きとも其

人の適せはるそれ如何せんや夫れ德川氏う三代以後天
下の政權を專握そふそのそ決して之か政權を執り
しもの、賢良なるとふ因るにあらはるふり全く祖先
れ制定したる組織の完全なるふ據るなり彼れ關東形
勝の地ふ據り諸侯の質を擁し之と大城の内ふ集めて
以そ抑制そるふ因るなるを故ふ其靜寧ふ歸したるも
のそ心裏上の制馭ふ據るとそ寧ろ外形上の制馭ふ
據るその多きなりされそ此の如き人を以そ巍然そる
大城の内を出て開豁ふる廣野の外ふ逍遥し數こ公衆
の耳目ふ接せしめて威嚴地ふ墜ち政令遂ふ行ハれさ
ることそ防くへうらさるの勢なり是時ふ當りて德川

政府の内部ふも既ニ人材登用の論あ[illegible]て復舊時の如
きものふあらんと雖も如何ふせん未た上位ふ居ふも
のすても變改すふまい至らさ[illegible]き故ふ其京師ニ出て
て他の諸侯と併列せ[illegible]や復外形上の威嚴以て其勢を
添ふ[illegible]その外し故ふ諸侯伐服せしむ[illegible]ん勢力を上洛
の時ニ當りて隱然消散せり況んや此時ニ當[illegible]て關西
諸國の諸侯の如きと早く既ふ外國舩突入の激動ニ感
して内部の改革を行ひ久く襲来せる門閥の弊を廢し
憂國の志士を撰みて國事を任し[illegible]れを之と應對の際
ふ於てそら數ニ軽蔑を免ふ社さりきはまを王室をし
て徳川氏ふ合せしめんとをて企てたる將軍の上洛を

却て徳川氏をして王室ニ屈服せしむ[illegible]此媒とふり天
子石清水ニ幸し自ら將軍ふ節刀を授々て攘夷と行ハ
むるの大事件を發すふニ至れり是時將軍病みて出
ぢる能ハす代理の人亦疾ミて出つる能ハを由りて其
事遂ニ行それさりしを徳川氏内部の醜体是ニ至[illegible]て
全く世ニ發露せり
然れとも此時ふ至りて王室ハ始りて攘夷鎖港の全く
行ふ[illegible]らふる事と知らを之より先き水戸藩最
も鎖港と主張し一搞又其議を賛し以て徳川氏の政略
ニ抗したりされとも王室を二侯及ひ其他の諸侯と關東
ふ下ちて攘夷を決行せしめらをたれとも皆之を實行

そる能ゝさりさ是ふ於て公武合体の目的始めて達すゝを得て而して攘夷鎖港を主張そる縉紳諸侯及ひ民間の志士大ふ勢力を失へり

然ときとも徳川氏既ゝ人望を失せり豈久しく海内を制そる能ゝ得んや公武共ゝ開港の主義を執ふ及ひて鎖港攘夷を主義とせり民間の志士私ふ兵を執りて政府ふ抗そはそのあを（松本謙三郎吉村虎太郎等中山忠光を擁戴して大和五條ゝ及し平野二郎但馬ゝ及そ）藩士の京師を騒擾するもけあを（長州人来りて京中ふ戰ふ）諸侯の私ゝ外國と戰ふものあを（長州の人外船ふ發砲せしうそ外國人怒りてゝを撃ち馬關を奪ふゝ諸侯の内亂政府を煩ふそもの（先き薩州亦英と戰ふ）のあを（水戸藩ゝ内乱あり相戮殺そゝ）もの數年）て海内多事徳川氏殆んと之を制馭そは能ゝ不而して外國又頻ゝふ償金を促し徳川政府ふ過失を咎めたり凡政治の難此時ゝり難き者あらさゝ而て此等の事ハ悉く之を鎮定そゝを得ゝと雖も更ゝ一釁隙の乘そく者を示せり

之ゝり先き長州藩毛利氏數く徳川政府ふ命ゝ抗したり其所謂俗論黨ふゝもの恭順謹慎の意を致して多く謀ふ與ゝ臣下を誅そゝふゝ為ゝふ徳川氏そ之を寛恕そゝゝと雖も此時高杉晋作ゝ出そ自ら兵を起して俗論黨を撃ち闔藩の議論を一新せんゝ為ゝた徳川氏そ兵を發して之ふ滅せんと欲そり則ち従前の方法ふ因り一紙の命を傳へて地を割き若しくハ封を

移そその能ふるを察し征討の師を下ちて勝敗を試みんとせり是時ふ當りて長州と既に外國と一戰して大ふ兵制を改めたりされど其戰最も奇觀なるを鎖港攘夷を主張せる長兵ハ悉く洋式を用ひ軽装して銃砲を携へをり開港を主張し徳川氏の命を奉して攻寄する諸侯の兵と皆ふ元亀天正以来家傳の甲冑を着し鎗ひたる鎗を持ち瘠せたる馬ふ跨りて其勝敗知るべきなり若し其れ徳川氏をもて全力を盡して之ふ向ひ与ゆて其長州を破ることを必せり然るふ此時家茂將軍死去し内外多事ふして為めふ催ふ長藩に諭ちて兵を退うしめ以て一時を苟安せり

されど既ふ人望を失せる徳川政府と更ふ兵力ハ弱ふることを示せり故ふ茲に至りて徳川氏ハ既ふ己に政府たるハ權力を失ひしなを因りて大藩外諸侯を勿論小藩譜代と雖も其命ふ從ハさふもの多うきはもて土佐侯山内氏其臣をして十五代將軍慶喜ふ説かしめて曰く泰西人来航以来物議紛然東攻西擊殆んと寧歳なし恐らくハ外國の軽侮を招かん是れ政令二途に出て天下耳目の属する所を異にすふう為めふ宜しく政權を王室に奉還し萬國と併立するの基礎を立つべし」と將軍其説ハ容れて政權を奉還せり

然りと雖も徳川氏の封領を削ゝへうらす其臣下の多

き糧食の足れる海内固より之と比すべきふ〳〵若し夫れ隱然關東に據りて唯く朝廷の命是き從ひたらんふを之を如何ともすゝ能はざる〳〵然れとも薩長土等の藩臣う朝廷は權を專らふする我見なるら其命を奉ゝゝは人情の堪ゝふ能はざる所のものあらん終に伏見の變を發し一敗して關東に退くり

伏見の一戰ゝ天下の向背を決したふう如し〳〵然れとも德川氏ゝ尚ほ海内は強國をはを失はざりき其陸軍の如きゝ當時最も熟練せるものなゝき海軍の如きふ至てゝゝ他の諸侯嘗て之ゝ有するふゝのなし而して德川氏は開陽蟠龍回天以下數多は軍艦を有ゝたり伏見の一敗ゝ以ゝ從來主要ふ當りしふ舞妓の俗物を排除すゝは幸機となりたるゝ〳〵されゝ若し更に關左の兵を起して東海東山の二道を上らしめゝ天下は事未た知るへからゝなゝ然きとも此時外患方ふ深く干戈を邦内ふ動ゝへきの時にあらゝゝ故に將軍慶喜ゝ勝安房大久保一翁の說を容れ自書臣下を戒めて曰く官軍ふ抗ゝふなゝ之は官軍ふ抗するふゝのは猶刃を吾に加ふるう如きふりと即ち江戸城及ひ軍艦銃砲を朝廷ふ献し而して身其命を俟てりされゝはしもに堅守ふりし德川政府の組織も民間の輿論ふ抗しふう為めふ開港後僅九年にして終に解体ゝるゝゝを盖し當時の輿論

うし〳〵鎖港攘夷の一論の如きを何そ必ずも策の得たるもはなならんや今日三尺の童子も尚ほ其非なることを知る〳〵徳川氏う終始開港を是とせるとしい國家ふ大功あるとと云ふ〳〵然まるも此の如き固陋ふる輿論も尚ほ且壓服するふ能ッをもて却て自ら倒れるとて國家の大權を執ッえのふして此理を解セさるとなは徒ふ社會ふ風波を生セんのミ徳川氏の如きを好亀鑑を社會ニ遺したるとと云ふべし

然れとも外交一たひ開をて而して徳川政府の制度を永遠ふ保持そるを到底望むべうらさるなり蓋し徳川氏の制を諸侯及ひ人民の反亂を防くふ於を最も緻密なる所あり故ふ二百五十年の久しき一諸侯の叛くものあるなし然まとも海内連合して外敵ふ向ふは時ふ至りてを封建制度の區畫全く無用のもはとなれを古語ふ曰く同舟颶ニ逢へを呉越相救ふと故ふ秦兵強き時を六國連合し佛兵強きとなは英日連合す其連合の時ふ當をりてや固より六國ふく英日なきとり外船は突入するや日本人民の恐怖せしと實ふ非常なりき故ニ封建の分子を此時早く既ふ破滅し彼の族を重んをるの習氣全く社會を去れり諸侯の内部ふ於てい皆改革を行ひ皆日本國を思ふの人をして藩政を司らしめたり此時ふ當りて此等の人の心裏復其君ふ忠を盡さ

んとの念あらざるあり其藩伐愛るれ念あらはるな
て全く日本國をのみ憂ひて少しく更に勤王の志を存
せしものなて此の如き人物も豈是れ封建の人ならん
や全く郡縣の人なるべしされど徳川政府を滅したる
て外面まてい封建諸侯の力れさう如く思ひふれとも
其實ハ愛國の志士封建れ遺物なる一團結に因りて其
目的を達せしのみされを徳川政府の滅せし後四年ふ
志て明治政府を遂に封建を廢して郡縣と為さしと雖
も海内一人の其君ふ忠なるものあるて之に抗せしハ
となし蓋し之伐聞く封建制度れ盛んなるや人民愛藩
の念あるて愛國の心なし敵國外患の強きや愛國の心

あるて愛藩の念ふしと今ま徳川氏れ末路愛國の心あ
るて愛藩の念なきを見れを則ち徳川政府の滅るる所
以を封建の滅すふ所以なるを知るべし然らは則ち其
滅るるや命なり何そ必ずも責を一二執政者の過失ふ
歸すべけんや

日本開化小史卷之六終

跋

明治復績。百度皆新。天下之事。卒取法於西國焉。獨史籍之體。全仍舊貫。雖浩何補。吾友鼎軒田口君。夙通經濟之學。觀史有感。嘗慨古今史乘之無

益世道。倣西國開化史。著此編。以論我國文物之所以昭晳者焉。其博識卓見。非尋常史家之所及也。嗚呼。伴孤燈。數卷耳。而謂浩也。然擴而充之。可以壓倒萬巻矣。可以滔然天下矣。蓋以其平素所蘊蓄者。溢而為史也。然則親斯書者。謂君善以學成史。則可。謂史善以史成學。則不可。

明治十五年三月七日

香亭　中根淑識

明治十一年二月廿六日版權免許
同十五年十月出版

著述兼出版人　静岡縣士族　田口卯吉
東京牛込區牛込北山伏町四十三番地

東京書林賣捌

日本橋通二丁目　北畠茂兵衛
同　通二丁目　稲田佐兵衛
芝三島町　山中市兵衛
淺艸茅町三丁目　北澤伊八
小石川大門町　青山清吉
日本橋通三丁目　丸屋善七
同　通二丁目　小林新兵衛

010190529555
48-13784